

# 徳富蘇峰記念館

えにし

目録 — (27)

## 書簡にみる縁展

展示期間◇平成二十二年一月六日(水)〜十一月二十九日(月)

### ① 徳富家の縁

徳富 一敬 (1822〜1914 文政5〜大正3) 熊本県 号・淇水  
 幕末・明治期の漢学者・教育者。蘇峰・蘆花の父。徳富家は代々肥後国  
 葦北郡水俣郷・津奈木郷の惣庄屋兼代官を勤めた豪農で、一敬は第8代  
 当主である。藩校時習館に学び、のち横井小楠の門に入る。嘉永5年葦  
 北郡宰付監察に推挙され、民生に尽力。明治2年の藩政改革で熊本藩奉  
 行所書記兼録事となり、のち民政大属となる。廃藩置県後熊本県典事、  
 白川県七等出仕に進む。明治13年熊本に私立中学校共立学舎を開校し  
 た。展示書簡は返子からのもの。

明治29年10月1日付(封書・墨書) (ロンドン滞在中の蘇峰へ)  
 一筆申入候 時下秋冷朝々ハ綿入ヲ掛ケ申候 至極ノ空合其地ハ来信ノ  
 通ニテハ最早冷気も過候半と存知遣申候 久々の航海鈍牛丸別離ノ文章  
 ニテ八十餘日ノシヤガ(車駕)責ニハ如何ナル堅剛力も随分氣削為被  
 申 今程ハ大陸日朝蔓辺ニ有之候也 青木氏も久々ニテ本朝ノ直話を聞  
 大慶可被致ト存候 此元家延老壯少孫打揃無事各自夫々ニ従事水川町  
 も近來ハ健次郎塩梅も宜無事相働 お逸(蘇峰の長女)も愈勉強だと  
 日々昇校 萬熊(蘇峰の次男)愈以躰知共ニ成長 お孝(蘇峰の次女)  
 日々進歩最早さわりなしニ立自分机江朝々参りうつくしくと申ぢ以  
 くくと申小皿を比ねぐりビスケットニツ阿たへ候ハバ大慶誠ニ可愛盛  
 りニ候 此日より庭内芝摘ニ植木屋年若もの二人入柳屋(返子の旅館)  
 へ朝朗木類共夫々植付申候 大分松も折合女郎花撫子桔梗三品はもはや  
 三十日程も散りてハ咲散りてハ咲 殊に美事ハ岩牡丹縁先より山道及老  
 松下土手の内側天氣ノ節ハ満庭ノ花ニ有之候 (中略) 当年は奥州津波

より始秋田辺迄懸其後地震慘状を究又々洪水ニテ溢水ハ奥州より越中  
 越前京都府管下福知山京阪間淀川堤及阪神間江州岐阜愛知三重県ニ至  
 終二府下権限当口打切向島浸水家屋皆床上ヲ浸一昨日湯浅湖水辺雑色  
 村落屋根斗出軒下浸水三ヶ所も有之 多クハ床上二三尺ノ浸水ニテ老幼  
 高き所ノ寺堂森などニ団欒ヲなし憐れをとど免候よし 夫れ二引かへ中  
 国九州筋ハ悉登熊本県などハ昨年九十余万石ノ出来米 当年ハ夫レニ忒  
 割五分増しと申 評判ニ有之候 誠ニ異同甚夕しき年 就テハ諸物価騰貴  
 著しきハ玉子此元大一ツ三錢 並二錢七厘位 京都辺ハ一ツ四錢の由  
 先ハ此段迄書外ハ当月中旬後出京の上可申遣候 次第二寒サニ向候得共  
 別テ追々席二喰ハレラレ又事二懲り萬ニ衣装拔差ニ注意祈申入候也  
 二九年十月一日 一敬  
 猪一郎様

徳富 久子 (1829〜1919 文政12〜大正8) 熊本県上益城郡  
 女子教育者。惣庄屋の父矢島直明、母鶴子の四女。熊本女学校校長にな  
 った竹崎順子は姉。妹に横井小楠の後妻になった津世子や婦人矯風会会  
 頭となった矢島楨子がいる。21歳の時、横井小楠の高弟徳富一敬と結婚。  
 惣庄屋という家庭にあつて猪一郎(蘇峰)、健次郎(蘆花)、湯浅初子ら  
 三男四女を産み育てる。明治17年キリスト教に入信。熊本に女子教育施  
 設を提唱、明治19年熊本女学会を誕生させた。妹・矢島楨子の婦人矯風  
 会事業にも協力した。和歌を佐佐木信綱に学び、歌集『浜久木』がある。

明治29年10月1日付(封書・墨書) (ロンドン滞在中の蘇峰へ)  
 うつし植しき菊志らぎく色そへて 鎚せぬ岩乃かさしとやさく  
 秋深き山とりの尾のななき夜や 幾度八重の汐路こゆらん  
 思ひきやこと国くのことくさを 老の手ふたにとりてみんとは  
 十月卅一日 母より  
 猪一郎殿

徳富 蘇峰 (1863〜1957 文久3〜昭和32) 熊本県 本名・猪一郎  
 明治・大正・昭和期の言論人・歴史家。父一敬・母久子の第五子長男とし  
 て熊本に生れた。14歳で同志社に入り、新島襄の感化を受けた。明治14年  
 郷里熊本に大江義塾を開く。明治19年24歳の時『将来之日本』を出版、

文名を得て上京。赤坂氷川の勝海舟邸内借家に家族と共に住む。民友社を設立し明治20年『国民之友』、明治23年『国民新聞』を発刊した。

大正6年4月11日付（封書・墨書）

本日ヨリ旧百濟ノ都扶餘ト申ス所ニ立出三日計リ旅行可致候 昨夕御手紙拝見辱う存候 逗子ノ植木屋ニ芝ノ事及楠植エル事ト太多雄さんより作次郎ニ催促願上候 此地ハ頃日寒氣後戻リ申候 火桶ガ恋しく候 万熊も昨日ハ仁川港ニ一人ニテ見物ニ赴キ申候 同人も至極上元氣ニテ規則的生活ノ効能ハ歴然ニ候 何卒帰京后もカクアリタキモノニ候 扶餘より十三日帰り十五日ニハ平壤ニ赴キ十六日返り十七日夜より帰東ノ途ニ上リ途中海仰寺と申ス 汽車より二十四里隔テタル山中ニ立寄 二十一日釜山発ニテ渡海可致候 何事も予定ノ通相運候 先々満足ニ候（中略）世ノ中心人恃ムニ足ラズ 此上ハ唯タ一家ノ者互ニ同心一致家ヲ興シ身ヲ守ル外ハ無之候 セメテ一家夫婦父子兄弟丈ハ親睦信賴シテ行キタキモノと存候 予も健次郎一件ニテ多大ノ迷惑ヲ被ル凡ソ二十年 此レモ宿縁トアキラメ辛抱致候 セメテ我等夫婦は隔意ナク互ニ相信シ相愛シテ一生ヲ始終シタキモノと存候 何卒御身ニ於ても可然願入候 実ニ人間程當てニナラヌモノハ無之候 人間ガシミジミイヤニ相成申候 乍併今更人間ヲ止メル訳ニも參ラズ セメテ一家ニナリトモ立籠リタキモノと存候 呉々も我等老後ハ夫婦相携テ山ニ水ニ相遊ビ樂しき月日ヲ送リタラバと存候 此レガ予ノ理想ニ候 何卒末長ク御榮御付祈入候 只今ランブヲ附テ鶴ヤ雉子ノ鳴ク声ヲ聞キツ、此ノ手紙ヲ認め申候 此ノ手紙ハ逸子さん丈ニ御見せ被下度候 匆々不一

大正六 四月十一朝

蘇峯

静子さま

封筒表 東京青山南町六ノ三十 徳富静子さま 親展

封筒裏 京城清雲洞十二番地 徳富猪一郎

両親に一任せる予の結婚（『蘇峰自伝』徳富猪一郎著）

予は結婚に就いて別に一個の見識があつたとは云はぬが、併し予が同志社に居る頃、予の先輩の或る人々は可成り結婚問題に悩まされ、これが為に物議を起した事

もあつた。されば予は初から結婚に就いては余り多きを望まず、之を寧ろ運命に一任せんと決心した。（中略）何にしてもこれは人力よりも天運でありと諦めたから、已に天運であれば左程心配はするは徒勞であるかと考へ、一切これを人手に任すこととした。人手と云ふが、先づ両親に任するより外はないと考へた。

徳富 静子（1867〜1948 慶応3〜昭和23）熊本県 本名・津留。徳富蘇峯の妻。肥後熊本藩士・倉園又三の長女。

明治30年5月9日付（封書・墨書）（ロンドン滞在中の蘇峰へ）

四月六日御仕出の御書状 昨日相達し拝見仕候 此頃ハアメリカよりの御便より御待申上候所 あまり御延引にて如何遊し候やと夫のみ御心配申上候所 御病床よりの御書面にせつし開封致し御病の字を拝見 むねを打ち父上様と顔を見合せ驚入り 拝見仕候へバ 誠ニ唯ならぬ御病氣にて実ニ御あやうき所嘸々深井様御心配遊したる御事と奉察上候 幸ニ早々御快方に向ひ誠ニ神の御恵みと奉感謝候 深井様御丹精医道も開けたる所なれば何一つ御考支御不足ハなひと申ても他人里嘸々御心配遊ばしたる御事と奉存上候 早々御面会致したきハ山々なれど 御後の御つかれ御保養の爲めニハ可成御帰り道ハ御ゆつくりの方よろしく又一方ハ何が何でも御目もし申上度いろく只く御念申上候のみニ御坐候 どうぞ今しはらくハ何事も御かんがへなく御肉躰大切に遊ハして早く御安着のほど折上申候 此元御老人様方も別ニ御變りも御坐なく候へとも父上様ハ先日御出京後少々御不快の所もはや御全快遊ハし候間御安心願上候 母上様ハ久々東京へ御眼御治療のため藤島様へ御逗留もはや大分よろしく今七日斗りも立ち候へバ御帰宅のはつに御坐候 私事も三度御見舞に參り藤島様一方ならぬ御世話にて大きに都合よろしく此後ハ御眼も幾分か御開き遊ハして御樂のみも今迄より御出来遊ハすかと皆々よろこび御待居申候 子供一同ふ事日々此頃ハ海辺へ參り魚をすくい貝をとり遊び申候 おとつさん御帰りハ今日からいくつねますかくとゆび折り数へ御待ち申上候 私事ハ何の申分なく毎日午前八時上様 お愛さん（蘆花の妻）と聖書の会 午後は十八史略の会をしていた、たき実ニ幸に御坐候 只今の様に何一つ自由なく不肖なる私の幸福を受け恐多き事ニ御坐候 粟つぶほどの御助けも出来ず口おしき次第なれど学問なく知恵なく致し方なく 志かし御両親様非常なる御慈愛の御教訓をこふむり大きニ学

間致し又御帰朝の上八いろく婦人の手本となる御話を相聞致し事のみ  
楽しみ我身に出来得る丈け八何事も御尽し申上まいらせ かしこ  
五月九日夜 静子

深井様ニハ永く宜く御目もしの上萬々御礼申のべ致し候 どうぞく横  
浜御着ノ事ハ御知らせ願上候 御着の上ハ決して東京ニ御出てなく直  
二逗子ニ御出願上候 かへすくも御肉牀大事ニ御病みの初めニかへら  
ぬ様御道中御注意第一に祈上申候

封筒表 合衆国桑港大日本領事館 徳富猪一郎様

大日本相州逗子桜山 徳富静拝

はしがき(『徳富静子』 晩晴草堂同人(徳富蘇峰)著)

平常院と申しますのは、亡妻静子の戒名であります。(中略)自ら申すも如何であり  
ますが、私自身も相当の難物であつたに相違ありません。各々異なつたる意味に於  
て、父も母も亦同様であります。私には五人の姉と一人の弟と弟の妻とがあります。  
世間では小舅のことを鬼八人と申しますが、私共の同胞も各々特種なる個性の持主  
であり、就中弟は天才肌でありました。然るに平凡なる、云はば甘くもなく、辛く  
もなく、苦くもなく、酸ばくもなく、恰も白湯の如き彼女がこの真中に入り込んで  
来たことは、此の難物揃いのグループの中に於ては、寔に意外の仕合せでありまし  
た。一口に申せば彼女は我が家の平和のマスケットでありました。彼女のあつた為  
に一家親類誠に楽しく、快よく、朗らかに平和の歳月を送りました。世間では私共  
兄弟の間に就て、いろいろ誤解がましいことを申して居りますが、私共は弟夫婦に  
対しても徹頭徹尾何等の感情を掻き乱したることはありませんでした。私は私の母  
を親愛し、尊敬し、感謝しますが、然し母をして平常院の位置に立たしめても、恐  
らくは彼女以上の平和のマスケットたることは難かつたであらうと思ひます。

徳富 蘆花(1868~1927 明治1年~昭和2) 熊本県本名・健次郎

明治・大正期の小説家。同志社中退。キリスト教の伝道に従事した後、明  
治22年上京し、兄・蘇峰の経営する民友社に入り、翻訳・人物史伝・短編  
小説などを発表。明治31年末から『国民新聞』に連載した『不如帰』が単  
行本として出版されるや好評を博し文名をあげた。次いで随筆小品集『自  
然と人生』長編小説『思出の記』を出版するとともに長編『黒潮』を『国  
民新聞』に連載。自作を無断削除されたことから、民友社との関係を断つ  
ことを決意。明治36年『黒潮 第一篇』出版に際し、巻頭に兄への告別の  
辞を掲げ世評をよんだ。明治39年聖地巡礼の旅に立ち、パレスチナから口

シアへ赴き、トルストイを訪問、帰国後農村に永住の地を求めた。明治43  
年の「大逆事件」に際し、一高で「謀反論」と題する講演を行ったこと  
は有名。蘆花夫妻には子供がなく、一時蘇峰の六女鶴子を養女にした。

明治41年8月23日付 (封書・墨書)

拜啓仕候 いづれ参上の折あらためて御相談申上ぐ可く候得共 一先書  
中を以て尊慮伺置度 藪から棒は御免下され度奉願候 ツル子を養女に  
仕度 御割愛御出来申間敷や切望 幸に御承引下され候はゞ千慶万福に  
御座候 季のことにはあり また当人も双親の膝下をはなれ同胞に引わ  
かれて独田舎の叔父叔母の家に養はるゝは可愛想に候得共 親になつ  
て見たき両人の衷情御察下され何卒御承諾の程奉希候 老少なき家は  
全き家にあらず 而して血は終に水よりも濃く有之候不悉

八月廿三日

兄上様 姉上様

健次郎 愛

封筒表 赤阪青山南町六の卅 徳富猪一郎様  
封筒裏 府下北多摩郡千歳村 徳富健次郎

随想集「新春」(徳富蘆花著)

明治四十一年の秋に数年の三歳で来て、大正三年の春の暮に九歳で帰つたので  
から、五年と八月、彼女(蘇峰の六女で蘆花の幼女となつた鶴子のこと)は私共と  
共に居て、私共の寂寥を慰め、季つ子に生まれて甘え癖の除かぬ私共に幾分の親心  
を育てゝくれたのです。彼女が去つたのは、彼女の祖父私の父の亡くなる五日前  
でした。前生の業から父の臨終を他所に見なければならぬ私が、よそながら暇乞いの  
意味もこめて遣つたのですが、要するに自然に復へつたのであります。手短に  
云へば、大正三年五月に私は父と女を亡くしたのです。老人と子供のない家は、家  
らしくなくてそれは淋しい。(中略)だゝつ瀧い家にはしゃぐ甲高な声もトントン  
廊下を走る音もなく、土用干にも紅や紫の美しい色はなく(一切焼き捨てゝしまひ  
ました)笑が其慮から遠のいた家は、何と云ふても灰色の空気に掩はれ喪の家で  
す。美しいもの可愛いものを挙げて焼き尽した灰の中から、焼け残りの手習硯の断  
片を見出したり、また私が常用の大工道具の箱の蓋に、何にでも名を書きたがる子  
供の癖で、鉛筆で大きく「つるこ」と書いてあるのを見る毎に、随分と忍ぶ私の心  
も痛を覚えずには居られません。私の家では、剥暦に一家の記念日をそれぞれ記入  
して、其日には赤飯を炊いたり、色々の方法で記念することにして居ます。私共の  
誕生日、結婚日、千歳村移転日もあれば、両人の尊属の命日もあります。トルスト  
イの名も十一月に記されてあります。五月廿二日の葉には、飛び去つた鶴の名が書

いてあります。

徳富 愛子（1874～1947 明治7～昭和22）熊本県菊池郡

徳富蘆花夫人。酒造業を営む原田弥平次の末娘。12歳の時、熊本市に移住。熊本英学校付属女学校を経て、明治23年東京女高師に合格、明治27年卒業し日本橋有馬小学校教員となる。この年、20歳で当時民友社の記者だった徳富蘆花と結婚。蘆花は『不如帰』『自然と人生』など名作を生むが、徳富家への反逆、妻への劣等感などで、愛子の結婚生活は苦勞が絶えなかった。

昭和3年3月26日付（封書・墨書）

長らく拝借の書簡百廿五通及、外貳、本日代理を以て御かへし申上ますことを御許し願ひ申上す。そのうち採用致しますにあたり全部年代順にとりそろへましたので、どれが謄写済のであつたのかわからなくなりましたのと御袋の表に御記入の数と多少が出来てまいりましたが総数に於て、まちがひなくおさめましたからどうぞあしからず御赦しをねがい申上す。いづれおめもじの上にて御礼申上度。とりいそぎ右御挨拶まで。十二月十七日 愛子

御兄上様 侍史

封筒表 徳富兄上様 大津寿枝嬢 持参

封筒裏 徳富愛子

## 2 さよごまな縁

与謝野 鉄幹（1873～1935 明治6～昭和10）京都 本名・寛

明治・大正期の歌人・詩人。京都市外岡崎村の浄土真宗西本願寺派の支院・願成寺に生れる。父・礼蔵の事業負債のため願成寺は転売され、一家で鹿児島に移る。その後親とも離れ流浪生活が続くが、西本願寺で得度し、礼譲の法号を得る。12歳のころ漢詩、万葉集に親しみ、父譲りの和歌も作った。明治25年上京し落合直文の門下に入り、近代短歌結社「浅香社」を創設し活動した。明治26年創刊の『二六新報』の記者となり文芸欄に詩歌を発表。明治32年東京新詩社を設立、33年機関紙『明星』を創刊。明治34年秋、晶子と結婚。新詩社は月例会も持たれ、順調

に発展したが、明治41年白秋ら7人の脱退事件が起き、11月、通算100号の『明星』は廃刊となる。明治44年渡欧しパリに滞在。晶子ものちにパリに赴く。大正4年3月の衆院議員選挙に京都府から立候補したが惨敗。『アララギ』が興隆した大正期以降は自ら疎外の位置に住す。その後は、慶応大学、文化学院でそれぞれ教鞭をとった。文化学院は友人西村伊作の創設で、妻晶子とともに協力した。

明治43年3月10日付（封書・墨書）

啓上唐突ながら御願ひ申上候。志賀先生（志賀重昂）の如く生駒艦に便乗致され候やう特別に御取計ひ願はれ申すまじく候や。小生は別途の記事を以て「国民」紙上に報答致し可申候。出発の時日も切迫致居候事と存せられ候が先生の御取計にて幸ひに便乗の榮を得候やうならば早速旅装など調へ申致候。右御懇願まで如此に御坐候。艸々拝具。三月十日 与謝野 寛

徳富先生 御直披

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎先生 御直披急

封筒裏 神田東紅梅町二 与謝野寛

与謝野 晶子（1878～1942 明治11～昭和17）大阪 本名・晶

明治・大正・昭和期の歌人・詩人。堺女学校卒。関西文学会に参加。明治33年来阪した与謝野鉄幹・山川登美子を知る。明治34年家を捨てて上京。この年歌集『みだれ髪』を出版し、鉄幹と結婚する。明治37年9月『明星』に掲載された長詩「君死にたまふこと勿れ」の詩は日露戦争、旅順攻撃に参加した弟の無事をひたすら祈ったものだが、社会性をもった内容は、この時代にあつては大胆な主張とされ、多くの論争を引き起こした。大正10年創設された「文化学院」では学監となり、女子教育の実践にも携わった。文学のみならず、教育・婦人・社会問題に関する著述も多い。

大正12年12月17日付（封書・墨書）

啓上 意外のお贈物を頂き、驚きのなかに、御深切を忝く存じます。お目に懸りまして御礼を申し上げますが、とりあへず、お使に待つて頂いて御礼を申述べます。「明星」ハ震災で休刊してをりますが、明春

四月から今一度出ず相談をしてをります。春になりましたら必ず御伺ひ致します。逗子の方に入らつしやいますか、何れ新聞社の方々に向つてから参ります。御健かに、新しき春を御迎へ下さることを祈上ます。艸々。

十二月十七日 徳富先生 御もとに

封筒表 徳富先生 御もとに 晶子

大正14年9月24日付 (絵葉書 浅虫名所乳母ヶ岩の写真・ペン字)  
御健勝にておはしまし候や。私ども十和田湖より弘前にいたり林檎の畑に夏をたづね岩木山にまゐり今日麻葱の湯にまゐり候。湯はあつきにすぎ候へどもけしきはうらさびしきものに候。先日は本の批評を御書き下され過分のことゝかたじけなく存じ居り候。

田楽の笛ひやうと鳴り深山に獅子の入るなる夕月夜かな  
つがるにてさるをどりを見物いたし候。 与謝野晶子

葉書表 東京市京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峰先生

三上 於菟吉(1891~1944 明治24~昭和19) 埼玉県

大正・昭和期の小説家。早大中退。大正4年小説『春光のもとに』を自費出版したが、朝鮮独立運動に取材したため発禁となる。その後『講談雑誌』『主婦之友』『婦女界』などに小説を発表し、文名をあげた。昭和3年長谷川時雨をたすけて『女人芸術』を発刊。昭和9年直木三十五、菊池寛、白井喬二らと共に文芸懇話会設立に参画、その間『敵討日月双紙』などで認められ『淀君』『雪之丞変化』などで大衆作家として人気を博した。

昭和12年6月18日付(封書・原稿用紙一枚・ペン字)

拝啓 私の持病については丁寧な御見舞状をたまはりまして有がたう存じます。発病当時 先生の御著書を読みふけてをりましたのは、あのまゝ死んでしまつたならば 猶更幸福なやうな気がいたします。しかし生きてしまつた以上は これからも一層勉強してゆくつもりで御座います。なにせ困憊いたしてをりますからにはるかに一書を裁して御礼を申し上げます。猶 長谷川もこの文章を書いてをりまして 先生の御厚志を非常に悦びをります。 敬具

六月十八日

封筒表 大森区山王 徳富猪一郎先生

封筒裏 赤坂区檜町三番地 三上於菟吉

三上於菟吉

長谷川 時雨(1879~1941 明治12年~昭和16) 東京日本橋 本名・やす小説家・戯曲家。父は日本最初の免許代言人(弁護士)の一人。祖父卯兵衛は諸大名の呉服御用をつとめていたが、維新後廃業。時雨は祖母小りんの秘蔵つ子として育てられた。明治17年秋山源泉学校に入学、24年まで読み書きそろばんの寺子屋教育をうけ、長唄、舞踊、二弦琴などの稽古にも通つた。15歳のときから3年間行儀見習いの奉公に出、その間左佐木信綱に入門。明治30年結婚するが家風が合わず、肺結核発病を機に離婚。鬱々とした結婚生活の中で書いた『うずみ火』を『女学世界』に投稿し特賞入選。以後投稿を重ね、生来の芝居好きから劇作へと向う。明治38年『読売新聞』の懸賞脚本で『海潮音』が特選となり、坪内逍遙に師事。女流劇作家として歩み始める。明治41年「霸王丸」の脚本が「花王丸」と改題されて歌舞伎座で上演。その後「江島生島」、「操」など次々に一流俳優によつて演じられた。明治45年、作家中谷徳太郎と雑誌『シバ井』を創刊、また尾上菊五郎らとは舞踏研究会を設立した。大正8年12歳年下の三上於菟吉と結婚。廃刊となつていた『女人芸術』を再刊し、ここから林芙美子、円地文子ら多くの女性作家を輩出した。戦時下には「輝ク会」を結成し、機関紙『輝ク』を発刊、文壇で活躍していた女性作家たちを総動員し、時代の中で文学を超えた広範な活動となつた。

昭和10年2月15日付(封書・墨書)

春寒いささかのびやかなる日 御尊居には鶯のおとづれなど御筆硯のおつかれをおなぐさめもふすかと存上申候。さきごろはおほつかなき幼時のそぞろおぼえの拙著御笑覧に供しその折をよきしほに日ごろよりの敬意をきこえあげんと存じをりつゝ延引その日を過ぎ候うちに思ひがけなき御尊書頂たい仕り忝けなくも申訳なく存上申候。三上よりも先生の御文通嬉し候。をりごとくにいつも御精励のこと鏡にいたす事をふしきかされ候事に御座候。今後何かと御教へねがひいで候こと深なるべく何とぞ御高教よしなにとつゝしみて願上申候。かしこ 時雨

封筒表 大森区山王二丁目二八三二 徳富蘇峯先生御許  
封筒裏 赤坂区檜町三番地 長谷川 時雨

『近代美人傳』に就て(『日日』より) 昭和11年6月25日 徳富猪一郎筆  
著者長谷川時雨女史は、恐らくは自身も此の傳中の一人たる可き資格者であらう。憾むらくは此の機会に於ては、女史は同時代に於ける同性の肖像を描く爲めに、遂ひに自画像には及ぶに遠あなかつたことだ。本書は明治、大正、昭和の三代を通じて、二十名の美人に就て語りたるもの。傳でもなく、評でもなく、固より論でもない。但だ老練なる女史の口より、女史と同時代の同性に就ての物語にして、中には世間の風評を、その儘掲げたる點もあるが、概して女史の親しく知る所に就て語りたるものにして其處に一種の妙味がある。諺に美人薄命と云ふが、必ずしも然らずだ。乃ち本書中に就て見るも、其の一生を乗除して、薄命なる美人もあるが、亦た薄命ならざる美人も鮮くない。薄命と否とは、美人なるが爲めと云はんよりは、寧ろ他の理由、若しくは事情に由るもの多き様だ。本分の記者は、随分世間に長く顔を出しているが、不幸にして書中の美人に就て、親しく知るころは多くない。姑らく記憶をたどるも、其の面識ある者は二十人中五、六人に過ぎず。其の親しく片影でも、遠方から眺めたる者を加へても、十人には上らない。されば本書に就て批判を試む可き自信がないのも、余儀ない次第だ。但だ姑らく記者の知る所の女性に就て、本書の記事の一節を掲げんに、竹本綾之助の項に、彼女には上無き誇りが、も一つある。それは童貞同士の恋人で、初恋の夫妻であるといふ。これも昔の人に於てはめづらしいことにはなければならぬ。三人の母の彼女の至上の宝は夫であり、彼女の夫の無上の満足は、妻としての彼女を持つことだ。とあるが如き、如何にも我等の理想を、其儘事夷化したものだ。本書には亦た故岡田信一郎夫人静子女史に就ても、其の波乱限り無き前半生を語りてゐるが、本書の原稿が、大正八年二月に成たるが爲めに、其の後半生も及んでいないのは、残念である。然も其の片影は、「家婦として堅気な粧ひをして、エプロンをかけ、襷がけをもしている。姑ともよく融和し、妹ともよく折合つた」と記している。岡田未亡人の如きは、幸運の神には神ひせられなかつたが、その堅き常識とによりて、其の逆境に順応し、自然に其の樂地を見出すに到つた。美人は決して美人たるが爲めに、薄命では無いのだ。

森田草平 (1881~1949) 明治14(昭和24) 岐阜県 本名・米松  
明治・大正・昭和期の小説家。東大卒。夏目漱石に師事。明治42年平塚らいてうとの恋愛事件に取材した長編『煤煙』を発表。好評を博し、次いで長編『自叙伝』『十字街』や、戯曲『袈裟御前』などを発表。大正12年長編『輪廻』を発表、自叙伝的告白小説に自然主義とは異なる境地

を開いて注目された。またイブセン、ゴーゴリー、ドストエフスキーなどの翻訳の仕事も多く、法政大教授もつとめた。昭和期には『吉良家の人々』などの歴史小説を多く書いたほか、漱石研究をまとめて、『夏目漱石』『続夏目漱石』を出版。昭和23年日本共産党に入党して話題になった。晩年の作に『細川ガラシャ夫人』がある。

昭和16年八月十一日付(封書・墨書)

拝啓 御病氣御保養中わざわざ代筆の御返書にあづかり却つて恐縮いたして居ります。先生の御微痒は在鎌倉の内山大人から一寸承りました。が、もはや山荘へ御轉地になられる程御快癒になつた事と存じ深く御喜び申し上げます。小生はともかく近世日本国民史七十巻を通読して先生から教へを受くること最も深きもの一人でございます。されば是非先生が先生の御本旨たる明治時代を書上げられる事を切望に堪へずそのためには是非とも今年御健康を保持せられることを衷心より祈つて居るもので御座います。織田豊臣時代の如きは先生から申せば序論のその又序論のやうなものでございませうが、それにも係らず読者を感銘させることの深きは全く、先生が信長も秀吉もすつかり御自分のものにして書いていられる所にあると存じます。これが私も自分で先生の跡を追うて見て初めて腹から分りました。史料の研究の進歩は二十年前と今日とは非常の差だと承ります。あの時代に於てあれを書かれた先生は、やはり在来の史家の持つていないものを持つていられる方であつたとつくづく感じております(若輩の妄言は何卒御許し下さいませ)。その意味に於て明治時代は是非とも先生に書上げて頂かなければならぬと存じ先生の御自愛を祈ることは全く切なるものがあります。私は目下小牧山の役を書きつゝあります。私の見る所では、秀吉には英雄を除く意志は全くなかつた、又その必要もなかつた。あれは全く家康から仕掛けた戦争であると断じて、その見地から少し許り物を云はせて頂きたいと存じています。第一巻では殆ど先生に読んで頂く程の箇所はない、強いて申せば「光秀は何故に謀叛したか」(これも先生に做つて附けた題ですが)の一章位なものでございます。先生の御返書に甘えて、自分の事まで言添へ申訳ありません。以上。八月十一日 森田草平 徳富蘇峯先生侍曹

封筒表 山梨県山中湖畔旭日丘 双宜荘 徳富蘇峰先生  
封筒裏 世田谷区羽根木町 一七四五 森田 草平

平塚 らいてう (1886~1971 明治19~昭和46) 東京 本名・明<sup>あき</sup>  
思想家・女性運動家。明治39年日本女子大政学部卒。女子大在学中より哲学書、宗教書を読み、禅の修業などで自我の確立を追究。卒業後は津田英語塾、成美女学校などで英語を学ぶ。成美女学校では閨秀文学会に参加し、与謝野晶子、馬場胡蝶、生田長江、森田草平らに教えを受ける。明治41年森田草平との塩原心中未遂事件の後、明治44年『青鞥』を創刊。その発刊の辞「元始女性は太陽であった」は女性解放のスローガンとなる。賛助員、会員、寄稿家などに、与謝野晶子、長谷川時雨、田村俊子、野上弥生子、国木田治子ら当時の女流作家多数を結集し、文芸運動のみならず、婦人運動に大きな影響を与え、文芸誌として始まった『青鞥』は婦人問題雑誌へと性格を変えていく。大正2年『円窓』を刊行するが発禁。大正3年5歳年下の奥村博史と出会い、旧民法を否定し、事実婚という新しい男女の共同生活を実践し、婦人問題評論家として活躍する。大正7年与謝野晶子、山川菊栄らと母性保護論争を展開する。大正9年市川房江、奥むめおらと共に新婦人協会を結成し、治安警察法修正や花柳病男子結婚制限法の運動、婦人参政運動を行い、無産運動にも接近する。昭和4年消費者組合へ我等の家を設立。戦後は平和憲法擁護を唱えるなど一貫して反戦平和の女性運動の先頭に立った。

大正15年10月6日付 (封書・墨書)

拝啓 近著「女性の言葉」御贈り申上げました 御納め頂きたく存じます。御多忙の中へあまりにかつて過ぎた申し分では御座いますが御覧頂ければ、更にそれ以上御批評を頂ければこの上ない幸と存じます。御健康を御祈り申上ます。十月六日 平塚 明

徳富蘇峰先生 御侍史

封筒表 京橋区加賀町国民新聞社 徳富蘇峰様  
封筒裏 府下千歳村烏山住宅 平塚 明

高浜 虚子 (1874~1959 明治7~昭和34) 愛媛県 本名・清  
明治・大正・昭和期の俳人・小説家。祖母峰の実家高濱家を継ぐ。父は

藩の剣術監。母の文学趣味は幼児の虚子に影響を与えた。父が帰農を志し、柳原村に住むが、その地の風光の麗しさが他日文学を志す素地となったという。中学4年の時『国民之友』で幸田露伴の『一口剣』、山田美妙の『胡蝶』、坪内逍遙の『細君』、森鷗外の『舞姫』などを読み、小説家を志望。また俳句にも関心を持ち、少年時代から親友であった河東碧梧桐より東大在学中の正岡子規を紹介される。雅号「虚子」は本名と同音にした子規の命名であった。子規は、碧梧桐には「洗練」、虚子には「縦横」の二字評を与え、二人は子規門下の双璧と称された。明治29年の帰郷の際、松山中学校教師の夏目漱石と交わる。明治30年柳原極堂が子規の後援で『ホトトギス』を創刊するが経営難となり虚子があとを引き受け、31年発行所を東京に移し、37年末から38年にかけて、漱石の『吾輩は猫である』が連載された。明治41年10月国民新聞社に入り、文芸部を設けたが、明治43年には小説雑誌化の傾向にあった『ホトトギス』の衰退を挽回するため、国民新聞社を辞し、鎌倉に居を定めた。45年7月号より『ホトトギス』雑誌欄を復活し、花鳥諷詠の守旧派として俳壇で全盛期を迎える。昭和26年3月『ホトトギス』雑誌選を長男年尾に譲り、次女星野立子主宰の『玉藻』にも協力した。29年文化勲章受賞。34年4月永眠。戒名は「虚子庵高吟椿居士」最後に「独り句の推敲をして遅き日を」を残した。

明治43年1月1日付 (封書・墨書)

改年の御慶千里同風目出度申納候 敬具

一月一日

蘇峰先生 坐下

封筒表 青山南町六ノ三〇 徳富先生  
封筒裏 麹町区五六番町三 高濱 清

大正6年6月28日付 (葉書・ペン字)

拝啓 先日は尊著蘇峰詩草御恵與被下奉明謝候。謹読仕度葉紙在之。河口湖八流石に風景宜敷候。増宿ハ非常に難路の由、若し天候宜敷無之且つ駕無ければ健康の心配より御免を蒙り候ハ不斗不悪御免被下度候。

葉書宛名 東京京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峰先生

山梨県吉田にて 高濱 清

『高濱虚子全集』(「日」だより) 昭和9年9月19日 徳富猪一郎筆

俳人にして文章を善くするもの、古より其人多し。西鶴の如きは今や壇林派の巨擘としてよりも、寧ろ一代男、一代女の作者として知られている。芭蕉は固より、蕪門の十哲は、概して文詞に拙ならず、蕪村亦た固より然りで、独り我が高濱虚子君に限りたるのではないが、それでも世間では文壇に於ける虚子君に就て、認識不足あるが如きは、我等が頗る遺憾とする所だ。此れは世間が余りに虚子君が俳壇の巨匠たるを認識して、却て他の一面を閑却したる為めと云へば、相当の申訳にはある。何は兎もあれ我等は「高濱虚子全集」の刊行を歓迎する。昨今手許に達したるものは、第四、第五及び八、九、十の五冊にて、恐らくは更に他の五冊も追々出て来るものと察せらるゝ。今既刊五冊に就て見れば、殆んど皆な記者の一説を経たるものゝみだ。而して概して愛読を経たるものゝみだ。其の四、五両冊は、小説集にして、其中には長短の各種がある。長編中にて「俳諧師」は、恐らくは小説家として、虚子君の出世作とも云ふ可きもの。其の「国民新聞」に掲載せらるゝに就いては、記者も亦た聊か干係が無いでもかなつた。今にも其後纏めて刊行せられたる著者の寄贈本は、珍重愛護している。将た小品中には「風流儼法」や「杏の落ちる音」などがある。虚子君は写生文の大家であるが、然も君の写生は世の所謂の写生でなく、眼に別眼があり、手に別手あり。一寸誰にも其の真似が出来難い。八、九、十の三冊は何れも俳話集にして、著者が俳句に於ける三昧の說法、「金鍼度人の方便」と云う可きもの。然もそれは必ずしも俳句にのみ執着したる文字ではない。それは所謂の俳話にて、俳句の話のみでなく、俳人としての眼界、俳人としての心境からの話として見る可きもの少なからず。乃ち何等俳句に素養が無きものも、将た俳句に興味を持たぬものも、之を説んで若干の面白味がある。第八巻の巻頭に掲げられたる写真は、正岡子規君を中心として、其の友人、門下生、其中にて最年少たる吉野左衛門の如きは、今や即ち亡し。人生如露如電、記者は偏に虚子君の現在の健康を祝し、且つ将来の健在を祈る。

杉田久女(1890~1946 明治23~昭和21) 鹿児島県 本名・ひさ

俳人。東京女高師付属御茶ノ水高女卒。官吏の父とともに沖縄、台湾、東京と転任。明治43年小倉中学の教師杉田宇内(東京芸術学校卒)と結婚、小倉に住む。句作を始め『ホトトギス』に投稿し高濱虚子に師事。

大正8年「花衣ぬぐやまつわる紐いろいろ」の重厚で絢爛たる作風の句で注目される。日常生活の中で次第に自分と夫の生き方の差に悩み、俳句に没頭する。大正11年の句には「足袋つぐやノラともならず教師妻」がある。昭和6年、新名勝俳句懸賞募集で「併して山ほととぎすほしいまま」が金賞受賞。昭和7年『花衣』創刊。昭和9年『ホトトギス』同

人。万葉調を駆使した独自の句境を樹立し、迫力ある作品を生んだ。昭和11年『ホトトギス』同人除名。理由の公開も通達もない突然の除籍は久女にとつて俳句生命を絶たれたも同然だった。『ホトトギス』除籍については、久女の長女・石昌子編『杉田久女遺墨(続)』に記されている。畏敬し傾倒してきた虚子の処置に久女は致命的な打撃を受けたが、『ホトトギス』を離れて他派に移る気持ちは抱かなかつた。昭和21年大宰府の筑紫保養院にて死去。強い自我意識により世の誤解を招いたが、有数な近代俳句作家のひとり。ことに大正・昭和の女流俳句の発展におおいに寄与した。門下に中村汀女、橋本多佳子がいる。

昭和9年11月27日付(封書・墨書)

拝啓 その後先生みけしきうるはしく御消光被遊るゝ御事と拝察 御喜び申上ます 先般九州御来遊のせつは 誠に結構なる御講演拝聴いまだに身にしみ かつあの折の先生の御頬を流れてました御尊い汗と 御帽子とをいまだに忘れかねて居ります 只お一口先生にめし上つて頂き度くて 当地の銘菓御送り申上げました 何卒御身くれぐれも御自愛被遊れ 御長寿あそばして下さいます様 またの御拝眉を心からこひ願ひ上つゝ 先は乱筆ながら あまり御無音 御申上ました故御礼かたがた言上いたします かしこ

九年菊秋

久拝

徳富蘇峰先生 御座右

末筆ながら御夫人様にくれぐれも御よろしく御伝声願奉ります

封筒表 東京市大森区山王町一丁目 徳富猪一郎先生 御身前

封筒裏 小倉市富野菊丘 杉田久女

川田 順(1882~1966 明治15~昭和41) 東京

大正・昭和期の歌人・宮中顧問官・文学博士。漢学者川田斐江の子。東京帝国大学文科(英文学)では小泉八雲の薫陶をうけたが、翌年法科へ転科。卒業後住友本社に入社。明治30年佐佐木信綱に師事、「竹柏会」に入り歌の道を学ぶ。昭和11年に引退するまで第一線の実業人として活躍、その間歌人としてまた「新古今集」などの研究家として多くの業績を残した。明治31年に創刊された歌誌「心の花」に参加、歌人として出発する。大正7年刊行の第一歌集『伎芸天』は浪漫的歌風であったが、



大正11年の第三歌集『山海経』では写实的傾向の歌風へと展開した。昭和17年『鷲』で第一回芸術院賞、昭和19年『幕末愛国歌』などの三部作で朝日文化賞受賞。敗戦後は皇太子(現天皇)の作歌指導や歌会始選者になったが、昭和24年(恋愛事件)でこれらの職を辞した。(恋愛事件)とは元大学教授夫人鈴鹿俊子との恋愛事件をさす。死を決意したほど悩んだ末、昭和24年に俊子とともに家出。順68歳、俊子40歳、(老いらく)の恋としてジャーナリズムにとりあげられた。蘇峰の死去(昭和32年11月2日)の翌日、熱海晚晴草堂の蘇峰の靈前に、「天翔り終に歴史となりたまふ 噫我々乃蘇峯先生」と一首を捧げた。

昭和25年7月10日付(封書・墨書)

肅啓 面目次第も無之ほど御無音申上候 御寛容被成下度候 梅雨も曆通り本日にて終り候か。早旦足柄箱根の方に雷鳴轟々と聞え申し候 或はアメリカの演習する砲声かとも思はれ候 先生には引続き御清健の御事と拝察仕候 小生おかげにて例の如く頑健に候 よく食ひよく眠り申候 而して古机に向ひ売れもせぬ歌文を書き居候 これ以外に途なきもいつそ涼しきやうな心地いたし候 対馬海峡を隔てて対岸の雲行き大分険悪らしく候 後手、後手、これでは成らぬと心配致し候も、どうにも成らず候 ソ連の奴、おのれの孫を出して相手させ、舌出して居るらしく、憎らしい奴に候 この孫なく、強さうにて、このところ、小父さん夕チくに見え候 陋巷の一布衣、そんなこと心配致さず、似合ったやうに歌でも作り居れと、御叱り無きやう奉希候。酷暑の時御迷惑に候はずば、近きうち拝趨して高教に接し、又古版wordswordの高貴な匂ひを嗅がせて頂き度と念じ申し候 だだ静けく太平洋を見給ふか 鶏の林にあらし吹く時

七月十日朝

川田順 敬白

徳富蘇峰先生 帳下

封筒表 熱海市伊豆山 徳富蘇峰先生

封筒裏 七月十日 神奈川県国府津町 名取方 川田順 拝

『旅鷹』(「日」日だより) 昭和10年3月1日 徳富猪一郎筆)

古は詩人窮して而して後巧みなりと云った。されど『旅鷹』の作者川田順君は、交友財閥中の重なる一人、固より此の真理が当て嵌まる可きではない。これも君の

作は、年と俱に愈よ老巧となつて来た。然もそれが一切細工の痕跡を打ち消す程に、老巧となつて来た。川田君の血管に、故壺江先生の血液が流れているが為めばかりではあるまいが、如何にも才氣が活躍している。此れが為めに眼前の景、口頭の語、殆んど皆な和歌ならざるはなした。君が「尾山篤二郎君の下宿を尋ねて不在」と題する歌の中に、「とりちらけし西行傳の原稿を一枚讀みて欠伸をしたり」とあるが、その西行論は、蚤くに刊行せられ、記者も一讀して、本年一月十八日に、その感想を書き綴った。新大学生と題する十首は、父性愛の極致とも云ふ可きもの。其中に「学問を生きの方便にする者のろくでもなさはよく知りつらむ」の一首は、如何にも御尤も千萬だが、然も此れは川田君の如き人にして云ひ得るもの。世には生業の為に学問する可く、餘儀なき境遇に呻吟する者、亦た少からざるを知らねばならぬ。本集は最近二箇年の作四十一章、四百八十一首、其の大半は旅行中の作だ。而して其の足跡は寧ろ記者の曾遊の地が多い。それで記者には特別の興味湧く。百済古京賦三十首の如きその一例だ。其中にも「深夜散步、現今の扶餘は五百戸の小部落なり」と題し、「吾が部屋に寝床敷く間を居りかねて、そとに出れば遠蛙の聲」の一首の如きは、二十年前、記者の旅情を繰り返す心地す。又た「鄭孝胥先生」と題する中に、「先生の笑ひは昔ながらなり、大きくしづかに笑ひたまへり」の如きは、真に傳神の筆。君の和歌は、愈よ佳境に入りつゝあり。然も益々自然に、且つ清新に。但だ希くはその為めに、浪駕自放に陥らぬ様、少しく氣を付け給へとは、餘計な忠告かも知れぬが、感誦の餘一言すると云爾。

川田 俊子(1909〜2006 明治42〜平成18) 京都

歌人。旧姓・鈴鹿。寺の住職の娘。親の勧めで京都帝大院生中川與之助と結婚。三児をもうける。夫の留守中同志社女専で聴講。昭和17年から「八八キギ」会員。帝大名誉教授島文次郎宅の古典の講座に参加。昭和19年講師に招かれた当時62歳の歌人川田順と出会う。川田の新古今集評訳を手伝ううち、弟子をとらない川田の例外の弟子となり恋愛関係になり中川と離婚。昭和24年川田と結婚した。川田が皇太子作歌指導役も務める歌人で、俊子は京大教授夫人であったため、この恋愛はマスコミに大きく騒がれ、川田の詩の一部から(老いらくの恋)と呼ばれる。後に未成年の二児を引き取つて育てる。昭和41年に川田と死別。歌集に『蟲』『寒梅未明』、随筆に『黄昏記』『死と愛と』などがある。

昭和(24)年7月18日付(封書・墨書)  
きびしい御あつさとなつて参りました 其後先生には御障りもなくお

過遊ばされませうか御伺ひ申上げます 私どもお蔭様で無事暮して居りますから他事ながら御安心下さいませ いろくくと苦しみも致してまいりました私どもでございますが 昨今やうやく落つき京都を離れましたのが気持ちも一新いたし川田も歌文其他の勉強もはじめて居ります 私は当地に着きますと同時に出版会社から此際歌文集を出すやう進められ 私ごときものゝこととて随分迷ひましたが結極川田とも相談いたしまして勇気を出して、出して頂く事になりました そうして一生懸命で日を過して参りましたが二三日前やうやくすつかり終へ当地に参りましてから初めてくつろぎを覚えて居ります 極めてさゝやかなおはづかしいものでございますが出来上りましたら先生のおおめにかけていと存じて居ります 過日先生におもひ致しました事が其後の私にどのやうな大きな力をお与へ下さいました事でございませう 感謝の思ひで一杯でございます 此上ともおみちびき給はりませう何卒く御願ひ申上げます 当地ハ京都とちがひまして朝夕眺められます雄大な大自然のけしきは私にはめづらしく 潮ざいを聞いては時としてさびしさを覚えます 今後も苦難ハつゞく事と存じますが打勝ち切拓いて参る覚悟でございます 塩崎様にもいつも御親切にして頂き本当にうれしく存じます 近いうちに川田と共に参上いたす心積でございます 時節柄 御身くれくも御大切に遊ばしますやうお念じ申上げます かしこ  
七月十八日 川田俊子  
徳富蘇峰先生

封筒表 熱海市伊豆山押出 晚晴草堂 徳富蘇峰先生  
封筒裏 国府津町岡 名取和作様方 川田俊子

新島 襄(1843~1890 天保14~明治23) 江戸

明治時代のキリスト教の代表的教育者。安中(群馬県)藩士の子。アマリスト大、アンドーバー神学校卒。同志社創立者。元治1年蜜出国してアメリカに渡り、10年間滞在。その間洗礼を受け、キリスト教徒となる。明治4年にアメリカに來た岩倉具視大使一行の計らいで欧米諸國の教育事情を見学・調査し報告書の作成にも参与する。国を興すのは教育と知識と國民の立派な品行の力にあるという信念のもとに、帰国後米國の組合派ミッションの資金援助を得て、明治8年京都に同志社英学校、

明治10年同志社女学校を創立。明治12年神学校第一回卒業生として小崎弘道、横井時雄、海老名弾正らを世に送る。明治17年同志社大学設立計画を発表して大隈重信、井上馨、洪澤栄一、原六郎、岩崎弥之助、岩崎久弥らの募金を得る。蘇峰も東京方面の募金活動を支え、新島の没後も大正元年の同志社大学設立に際しては、政治経済学部創立委員長に就任するなど、生涯にわたって同志社を案じ奉仕した。新島襄は生涯キリスト教精神に基づく教育に専心し、同志社の発展のために心血を注ぎ、その途上で倒れた。明治23年1月22日、先生危篤の報を受けた蘇峰は東京から新島が療養中の大磯むかでや旅館にかけつけ、枕元で「遺言十か條」を口述筆記した。

明治22年12月28日付(葉書・墨書)

昨日は御繁劇中御身送り被下深ク奉拝謝候 着後至テ気分も爽快ヲ覚候間 乍憚御休意被成下度 猶人見君二も宜布御鶴聲の程希上候 勿々不宣  
十二月二十八日 大磯むかでや 新島襄

葉書表 東京、橋区日吉町 民友社 徳富猪一郎兄

新島 八重(1845~1932 弘化2年~昭和7) 会津若松

教育事業者。会津藩砲術指南役山本権八の娘。戊辰戦争会津鶴ヶ城籠城戦に断髪男装で戦列に加わる。戦いの後、川崎尚之と離婚。失明した兄山本覚馬を助けるため京都に赴き、生活を共にしながら京都女紅場の教員を務める。米国帰りのキリスト教徒新島襄と知り合い共鳴し、私有地、財産を新島に提供。明治8年同志社を創立。兄の影響で新時代の教養を身につけた八重は襄と結婚し、共に同志社の経営にあたる。病気がちな新島は明治23年急逝。のち同志社を家として門下生を子とする。日清・日露戦争時には看護婦を志願、傷病兵の看護活動にも尽した。

明治23年3月12日付(封書・墨書)

前文御尊免貴社御新聞二私ノ和歌御かかげ二相成候處 私ノ和歌ハ大磯の岩にくだけし志らなみも 玉と可がやく世にこそありけれ 右ノ通り相認メ候と存候得共ちがへ居申候間右申上候 しかし何れ二テもよろしく候えども鳥渡申上候まで

三月十二日

国民新聞社御中

新島八重子

封筒表 東京々橋区日吉町四番地 国民新聞社御中  
封筒裏 新島八重

\*書簡で新島八重が指摘した和歌は明治23年3月11日付の『国民新聞』には「大磯にくだけし波も白玉と かがやく世こそうれしかりけれ」と掲載されている。

国木田 独歩(1871~1908 明治4~明治41) 千葉県 本名・哲夫

明治期の小説家。東京専門学校(早大)中退。大志を抱きながら恵まれず、キリスト教に入信。明治23年発会の「青年文学会」に参加。その例会で蘇峰も演者となる。独歩と蘇峰が出会ったのは、明治24年1月の第3回例会であつたようだ。明治26年豊後佐伯で教師として過ごし、わずか10ヶ月だが佐伯の自然や城下で生きる心優しい人々と触れ、心酔したワーズワースの世界を楽しんだ。明治27年9月国民新聞入社。10月従軍記者として千代田艦に乗り『国民新聞』に、「愛弟通信」を連載して一躍文名を挙げた。弟の国木田収二も国民新聞社時代には北斗と号して筆を揮い、兄弟共に徳富蘇峰門下の逸材として筆陣を張った。独歩が従軍記者を終え帰国した際、佐々城夫妻(仙台藩士出身の医師・佐々城本支と社会活動家の佐々城豊寿)が記者たちを慰労するため開いた宴会で佐々城夫妻の娘信子と出会う。独歩と信子は熱烈な恋愛関係となるが、母親の豊寿は二人の結婚に猛反対した。今回展示の明治22年11月6日付の書簡は、佐々城夫妻を説得して貰おうと二人が蘇峰に依頼したものである。信子18歳、独歩25歳であつた。昭和28年11月蘇峰の媒酌により結婚するが、翌年4月信子の失踪により離婚に至る。独歩は明治31年転居した麹町の隣家に住む榎本治子と結婚。報知新聞社に入るが、明治33年には退社し、生活は窮乏する。明治34年代議士として政界出馬を企てるが提携者であつた星亨が暗殺されたことで断念。この年第一文集『武蔵野』を民友社より刊行。明治38、39年には第二、第三文集を刊行し、高い世評を得るが、この頃から健康を害し結核の兆候が現れる。明治41年2月茅ヶ崎の南湖院入院。南湖院から蘇峰に宛てた葉書は5月6日付である。翌6月咯血を重ね、23日午後8時永眠、38歳であつた。青山墓

地に眠る。戒名は「天真院独歩日哲居士」である。

明治41年5月6日付 (葉書・ペン字)

肅啓 又もや佳葉御恵送被下難有存候 昨日は又淇水老先生(蘇峰の父)御見舞被下難有存候 八十七才の御老体にして実に壯夫の態あり 来年米の御祝まで小生も如何にても生き度き者と存候

葉書表 東京赤坂区南町 徳富猪一郎様

五月六日夕 南湖院 国木田哲夫

国木田(佐々城) 信子(1878~1949 明治11~昭和24) 東京

父は仙台藩士出身の医師・佐々城本支、母は社会活動家の佐々城豊寿。両親ともにキリスト教者。相馬黒光は従姉にあたる。海岸女学校(後青山女学院に併合)に学ぶ。明治26年、母とともに北海道へ移住。母から英語などを学ぶ。明治28年6月、矯風会副会長であつた母豊寿と父本支が自宅で開いた従軍記者招待晩餐会に出席した国木田独歩と知り合う。11月両親の反対を押して独歩と結婚するがすぐに生計は逼迫し、半年で離婚。独歩の『鎌倉夫人』等で罵りを受ける。この後両親を相次いで失う。親戚のはからいで母の知人の代議士の息子森広と婚約。米国にいる森と結婚のため渡航中、船の事務長・武井勘三郎と恋愛し、病気を理由に帰国。武井の妻が離婚に応じないまま武井と同棲。森広は小説家有島武郎の親友であつた。後に有島は信子をモデルに『或る女』を書く。大正10年武井と死別。大正14年末妹の病気の看護を機に栃木県真岡に住み、この地で日曜学校を開き、子供たちに聖書と賛美歌を教えた。

明治28年11月6日付 (封書・墨書)

拝呈 陳者私共目下能事情恰んど進退之れ谷まる能悲境に陥りなす処を知らず 事もし此まゝにて押進まバ只私共の前途暗黒之外無御座親を泣かせ友を怒らし 終生の事一朝にして空しく 両個人間生きて甲斐なき事と相成可申 願ハ此悲痛なる境に陥りたる 両人の心情御推察被下 万事御頼み申上候間 佐々城氏と御相談之上 宜しき御取計らひの程奉願上候 頓首

十一月六日

信子  
哲夫

徳富猪一郎様

封筒表 赤坂区水川町五番町 徳富猪一郎様  
封筒裏 麹町区隼町三番地 十一月六日 国木田哲夫

岡本 一平 (1886~1948 明治19~昭和23) 函館

大正・昭和期の漫画家。妻は小説家岡本かの子。長男は洋画家岡本太郎。東京美術学校在学中、藤島武二に師事。卒業後帝国劇場の舞台装置に係ったが、明治45年朝日新聞社に入社し漫画を描いた。その描写は人間生活の機微にふれ、独特な漫文とともに多くの人々に親しまれ、政治漫画に一時期を画した。大正8年頃から妻かの子とともに参禅などして仏教の影響を受けた。

昭和9年11月21日付 (封書・墨書)

謹啓 未だ親しく御慈容を仰ぐ光栄を得ませんが、日常御尊敬申上げてをります。又近來ますます御健勝の御様子を承り秘に御悦び申上げてをります。陳者甚だ唐突の申上げやうですが愚妻かの子儀永年佛教を信奉研究したり参りそれに関する三四の著書を任りましたがこの度び大東出版の需めにより佛教讀本一卷脱稿出版いたしました。それにつき出版書肆は是非先生の御推薦の御一筆を頂戴願われまじくやと申します。かの子儀も一度はその光栄に預り度き願ひ兼々有之。小生まで申出でました。小生に於ても元より願望同意に堪へざるところよつて御願ひ申上ます。御繁多の中を誠に恐入りますが御一文を御下附下さらば有難き仕合せに存じます。実は兩人にて拝参直々お願ひしてみやうかと考へましたが御清閑を妨ぐを恐れわざと差控へました。昭和九年十一月二十一日 岡本一平

蘇峯先生 処皮下

封筒表 徳富蘇峯先生 御座下

封筒裏 赤坂区青山高樹町三 岡本一平

岡本 かの子 (1889~1939 明治22~昭和14) 東京 本名・カノ

小説家・歌人・仏教研究家。跡見女学校卒。生家の大實家は神奈川県高津の大地主で旧家。次兄雪之助は晶川と号し、谷崎潤一郎らと第二次『新思潮』を創刊した文学青年で、この兄によつてかの子は文学に開眼

した。跡見女学校在学中から与謝野晶子に師事、『明星』次いで『スバル』の同人となり、歌人としての才能を認められた。また『青鞥』に参加し、第一歌集『からきぬたみ』を青鞥社より刊行。その間、上野美術学校の画学生だった岡本一平から熱烈な求愛を受け、明治43年結婚。長男太郎を出産する。一平の放蕩、かの子の恋愛、さらに大實家の破産、兄晶川や母の死と不幸が重なり、かの子は強度のノイローゼに陥り入院。その後、魂の利那を宗教に求め、仏教世界に入っていく。第四歌集『わが最終歌集』で作家への転身を宣言したかの子は、一平らとともに2年3ヶ月にわたる欧米旅行へ出発。その後昭和11年には芥川龍之介をモデルにした『鶴は病みき』で念願の作家デビューを飾る。以後『母子叙情』『老妓抄』など次々発表、作家としての名声を不動のものにする。昭和14年、49歳で生涯を閉じたが、死後一平により『河明り』『女體開頭』など多くの遺作が発表された。

昭和 大正12年7月13日付 (封書・墨書)

御機げむうるはしくゐらせられ かげながら嬉しく存じあげをります。さて、今年のはじめ日々新聞にて拙著女性の書にあまさずばかりの御讀め言葉をたまはりありがたく、早速参上。御禮申述べたくぞんじをりながら、御尊用を御邪魔いたすもとさしひかへられ、つい御無沙汰にうちすぎをりました。今日べつにおめにかけます粗品、却つて御はずかしきばかりのもので御座いますが、何とぞ御納め下され度、伏して御願ひ申上げます。七月十三日 岡本かの子

徳富蘇峯先生 みもとに

封筒表 大森区山王一の二八三二 徳富蘇峯先生

封筒裏 赤坂区青山高樹町 岡本かの子

『女性の書』に就いて (『日日』より) 昭和12年1月16日 徳富猪一郎筆

教養ある女性の著作は、我等には特殊の興味を寄与するものが少くない。それは我々が軽々看過したる、若しくは一向に氣付かない、或は全く無頓着なる事相に就き、我等と殊なりたる方角から、それを觀察し、それを指點し、それに解釈を下すからである。岡本かの子女史の、本書の如きが即ち其の一だ。本書の目的は、女史が其の巻頭に語りたる如く、

私はこの書に於て、女性に希望と力と勇氣を与え度いと願っている。

それを読者に与へんが為めであらう。而して記者は之を通説してそれが若干達成せられてゐるものと断言するに遲疑しない。著者は現代の女性に稀なる世間的と、出世間的の両面の教養の持主である。記者は其の知り得たる狭き範圍に於て、各々其の一面の教養ある女性を認むるも、両面を併せ兼ねたる岡本女史の如きは、稀有の例であることを信じる。而して若し本書に特色ありとせば、恐らくは其の両面の融合せる教養から自ら流瀾し來りたるが為めであらう。女性に宗教は、猫に鏝節（野卑な比喩なれども）の趣がある。但だ動もすれば没宗教女性は、餘りに没宗教的であり、有宗教女性は餘りに有宗教的である。然るに本書の著者はそれが多からず、少からざる間にある。それは畢竟世間的教養がそれを調節する為めと云はねばならぬ。本書中「方丈記」の如きも、其の、

文芸的魅力と、内容の人生観とは、ものによつて離して考ふべきものである。でな  
いと知識的の女性に、多分の魅惑である孤独小善、厭世的なものに捉はれ易いもの  
もある。

の一節の如き、讀み來りて「善哉斯言」と云ひたき氣持がする。尚ほ「現今の社会は  
聖塚戦一の題目の中に、

子供が自然に秀才になれるのならいゝが、無理をしてまで秀才に仕上げる必要はな  
い。それよりか子供の氣持を明かに導くことが肝腎である。

一節の如き、無条件に同意する。更に記者が快説したるは、「水」の小品である。  
日本人が自然から与へられるている恩恵物の一つは実に水である。

とは記者も全く同感だ。何故に日本人は酒の代りに、水を飲まないであらう。日本人  
程、良水、美水、甘水に恵まれたものは無いのに。

齋藤 茂吉（1882〜1953 明治15〜昭和28）山形県

大正・昭和期の歌人、医師。東大医学部卒。守谷伝右衛門の三男、齋藤紀  
一の養子。医者・随筆家の齋藤茂太は長男、小説家・医者の中村杜夫は次  
男。明治39年伊藤左千夫の門下となり、『馬酔木』『アララギ』に短歌や評  
論を発表。明治44年頃から『アララギ』の編集を担当するとともに『新し  
い歌風』を志して左千夫と論争。左千夫没後は島木赤彦と『アララギ派』  
の中心的歌人となる。大正2年第一歌集『赤光』は万葉語を自由に駆使  
し、生命感あふれた歌風で注目された。大正10年第二歌集『あらたま』を  
出版。欧州留学後の大正15年から青山脳病院長の職を継ぐとともに、島木  
赤彦没後の『アララギ』を背負つて活躍を続け、昭和12年芸術院会員。近  
代短歌を代表する歌人であるとともに研究・評論の業績も多い。昭和15年  
完成した大著『柿本人麿』全5巻で学士院賞を受けた。戦争激化の中では  
戦争讚美の歌を盛んに書いた。敗戦後はそれまでの仕事を整理して歌集・

歌論集・研究書を出版し、昭和26年文化勲章を受賞した。

大正15年5月8日付（封書・墨書）

謹啓 春暖之候 先生益々御清適大賀たてまつり候 島木赤彦君につ  
いては生前は勿論逝去の際も非常に御同情たまはり深く、感謝奉り  
候 来る十六日午後一時より増上寺に於て赤彦追吊会相営ミたく存じ  
奉り候については先生に三十分間にて御参加たまはりたく、御経の  
終るのは二時頃と存じ候につき二時頃より三十分にてよろしく奉存候  
甚だぶしつけにて失礼千萬、何卒御ゆるし給り被奉願上候 なほ都合  
二より百穂画伯同道拝趨御願奉たく候 頓首拝  
五月八日

徳富蘇峰先生 侍史

封筒表 市外大森源藏原 徳富蘇峰先生 御直披

封筒裏 青山南町五ノ八一 青山脳病院内 齋藤茂吉拝

齋藤茂吉

齋藤茂吉博士の『柿本人麿』を讀む（日日だより）昭和10年1月13日 徳富猪一郎筆  
世界的の詩人にして、其の伝記の精確を飲く法馬の如きあれば、我邦の歌聖柿本人  
麿の伝記に就て、異説粉々たるも、強ち不思議はあるまい。我等はいま齋藤博士の  
本書によりて、一切の雲霧を排除し、青空に芙蓉峰を望むが如く、我が人麿の全貌  
を看取し得たと云はぬが。然も本書によりて、我等が人麿に関する知識と鑑賞と  
は、一大躍進したとは間違あるまい。著者は本書に就て、斯く語りてゐる、曰く  
本書は一面からいえば、私自身の手控へであり……ゆえに之を客観して譬ふ  
るなら、デパートのごときものである。「人麿百貨店」のごときものである。

と。如何にも適評であり、且つ名評である。実は記者も斯く云わんとしたる所で、  
却て著者に先んじて道破せられた心地がする。併しながら此の人麿の百貨店には何  
等のインチキ貨物は無い。中には我等の需要に応じたくない代物も陳列せられてい  
るが、それでも他人に取りては必要品かも知れない。凡そ人麿に関する一切の資料  
と研究とを、斯く迄精約に盛り上げ、織り込んだる著作は、前代未聞と云うも過獎  
ではあるまい。本書中、記者の最も愛読したるは「人麿評論史略」と、「柿本人麿  
私見覚書」との二篇だ。此れは寧ろ単行本として、大字美本に特製して天下の同好  
者に頒たれんことを希望して已まない。白状すれば記者の和歌に於ける知識は、全  
く素人である。故に今更嗚呼がましく人麿などの論評を試みる資格もなければ勇氣  
もない。けれども著者の鑑賞は、大體に於て大いに我意を得たるものがある。

人麿は長歌などになれば、實に骨折つていろいろの事を歌つてゐる。併し實際は  
真率で愚直とおもはれるほどに輕妙な點が無い。人麿のものは常に重々しく、切

實で、そのひびきは、寧ろ悲劇的である。……それと同時に人應のものには、いまだ「渾沌」が包蔵せられている。……重厚で沈痛な響は、其處から来るのであらう。

単だ此の一節を見ても、著者の眼孔は、他の見る可くして、未だ見るを得なかつた點を看破している。尚ほ著者が記者の旧友塚越芳太郎君の明治三十五年民友社に於て、出版したる人應論の一節を、先づ賛同の意味をもて引用せられたるは、意外の驚奇である。記者も塚越君の人應論には、該書出版の当時から、共鳴者の一人であつた。

齋藤 輝子 (1895~1984 明治28年~昭和59) 東京

旅行家。歌人齋藤茂吉の妻。青山脳病院の創始者・齋藤紀一の次女。大正3年学習院女子部卒業の年、病院の後継者婿養子となる歌人・茂吉と結婚。旅行家として日本全国300カ所以上を訪れ、アジア・アフリカの秘境にも度々出かけた。79歳で南極大陸に挑戦、南極大陸最年長の世界タイ記録を樹立した。その人間像は息子、北杜夫の小説『榎家の人々』に描かれている。北杜夫との共著で『快妻オバサマVS躁児マンボウ 喋り下し世界旅行』『同PART2』『Jの母にして』がある。

昭和25年1月1日付 (葉書・ペン字)

過般参上の折ハ御機嫌の温顔拝し誠に心よりうれしく其節の御添筆茂吉大変によろこび飽かず拝見してをります。厚く御禮申上げよとの申出で御ざいます。先日岸本様(御同級の理事をしておられます)に常磐会の件よくお傳へいたしをきました。但し名簿ハもはや品切れとか仰せで御ざいます。いづれ御連絡あることと存じますから左様御承知願ひ上げます。お寒さの折から一入御自愛專一に御健やかによい新年御迎へのほど折り上げます。

徳富先生 孝子様

塩崎様にもよろしくお伝へくださいませ

葉書表 熱海市伊豆山足川町 徳富蘇峯先生 徳富孝子様  
東京新宿区大京町二二番地 齋藤 茂吉 輝子

昭和29年6月2日付 (封書・ペン字)

過般は多勢にてお邪魔申上げ老先生のお元気なお姿を目のあたりに拝しほんとうに嬉しう御座いました。其節は御高著頂戴いたし誠にあり

がたく御礼申上げます。其節のシャシン不出来ながら封入御送り申上げます。御笑草までに。いよいよ梅雨の折から一入御からだ御大切に遊ばされ度心より祈上げます。孝子様(蘇峰の次女) 御上京のお序にハ御来遊のほど御待ち申上げます。

徳富先生 孝子様

塩崎様にもよろしくお伝へくださいませ

封筒表 熱海市伊豆山 徳富蘇峯先生 孝子様  
封筒裏 東京新宿区大京町22 齋藤 輝子

鳥居 龍藏 (1870~1953 明治3~昭和28) 徳島県

明治・大正・昭和期の考古学者・人類学者。正規の大学教育を受けなかつたが、東大人類学教室坪井正五郎の下で学び、同教室主任を経て大正10年助教となる。のち国学院大学、上智大学などで教えたが、昭和14年から10年間北京燕京大に招かれ、調査・研究に専念。調査は日本国内はもとより千島・樺太・満州(中国東北部)・朝鮮・蒙古・沿海州及び東アジアの考古学と人類学に不朽の業績を残した。特に満州の石器時代から漢代までの遺跡調査、蒙古地方の遼代文化の研究、日本石器時代人アイヌ説などが有名。昭和6年11月発行の『知友新稿』(蘇峰の古稀祝賀に出版された本)に鳥居龍藏の「世界貝塚発見史としての大森貝塚」の論文が掲載されている。

昭和7年3月10日付 (徳富蘇峰先生古稀祝賀会出欠葉書・ペン字)

やむを得ない事が出来ましたから欠席いたします。

三月十日

葉書表 東京麹町丸ノ内日本電報通信社(総務課) 内 鳥居 龍藏  
徳富蘇峰先生古稀祝賀会御中

鳥居博士の「遼の文化を探る」を読む(「日日」より) 昭和12年3月12日 徳富猪一郎筆

鳥居龍藏博士が契丹、遼の文化に於ける研究は、随分久しきものである。我等は近き将来に於て、其効果を、世界的に発表せらる可きを期待する。而して本書は其の前景氣の予報として、受取らる可きものだ。本書は昭和八年、八月~十二月に至る探査記と、同十年、十月~十二月に至る探査記とを併載したるものにして。前者は満州より外蒙古に及び、後者は満州より北部支那に及んでいる。何れも其の目的は遼の遺址に就て、其の文化の痕を尋繹することである。然も我等が通読の際、尤も愉快を覚えし

むるものは、後遊記にあらず、前遊記である。而して本書の記事も四分の三は前遊に費され、後遊記は四分の一に過ぎない。前遊の昭和八年の秋冬は、例の奉天北大營、柳條溝事件より、漸く二個年を経過したる後に、戦塵隨所にあがり、匪賊各所に蜂起し、普通人の旅行には危険千万であつた。而して其の行旅の艱苦も亦た当然之に伴うた。然るに鳥居博士は、君の夫人、及び龍次郎君、緑子嬢、父妻、母子四人連にて、出掛けた。而して夫人は固より無二の助手。龍次郎君は専ら撮影に、緑子嬢は専ら描写に、何れも博士を中心として、其の研究の完成に分業努力せられた。されば本書は、宛も一個の鳥居合名会社の研究事業報告日記の看がある。それにしても善く一家が此の如く、氣も、心も趣味も、學問も、斯くは能く一致したるものかと、羨ましくもあり、且つは喜ばしくもある。斯る清福の裡にありても、鳥居博士は、赤峰より林西に赴く蕭條たる支那寒村の一夜に、亡長男龍雄君を夢見ている。「彼は私の夢の中で……山東省武陵祠にある漢代の壁画の中の風俗を私の為に描く所であつた」と記してある。されば龍雄君の精霊までが参加したのであらう。幸運であつたのは、ワールマンハに於ける遼の陵墓探查中、賊匪とは少しも知らず、料理人として使用したる王某の爲め、匿にされなかつたことだ。後遊記の中には、醫巫閭山に上りて、遼の東丹王の墓を弔うたる記事が尤も光つてゐる。

鳥居 きみ子 (1882~1959) 明治15~昭和34) 徳島県

教育者・研究者。戸籍名はキミ。徳島の旧藩士の家に生れる。徳島師範卒。小学校教員として一年間の勤務の後上野音楽学校に入学したが、東京帝大人類学教室の助手であつた鳥居龍藏と結婚し退学。以後日本の考古学の開拓者として世界的な業績をあげる龍藏の協力者の生涯を送る。明治39年河原操子の後任として当時の内蒙古喀喇沁王府女学堂の教師に招かれ、夫妻で渡蒙したのも龍藏の蒙古研究という目的のためであつた。このときも含め再度の蒙古調査行の龍藏に同行して『土俗学上より観たる蒙古』を著したほか、克明な日記をつけるなどして龍藏の研究を助けた。のち鳥居人類学研究所を設立し、家族ぐるみの探検調査を続けた。

昭和2年3月2日付(封書・墨書)

御葉書御うれしく拝し上りました 誠二貴下お時間を私のおさき下さいまして御批評賜りましたよし 重ね々何と言ふ身にあまる光栄かと深く、厚き御思召を感謝いたして居ります 謹みて紙上にあらはれます日をおまちいたして居ります 先ハ阿らく御礼まで 乱筆にておゆるし被下まし 三月二日 鳥居きみ

主人よりもくれぐれ御よろしく申上ましてございます  
徳富先生 御前に  
御奥様へもよしなに御伝へ遊ばして被下まし

封筒裏 府下入新井宿二八三二 徳富猪一郎先生  
封筒裏 麻布区霞町廿一 鳥居きみ

昭和2年5月10日付(封書・ペン字)

主人や娘が発の折は御心つくしの御国産のお菓を頂きまして御芳志を一同厚く感謝いたして居ります 下に私も家の方も先月末にやうく研究のたしにと一年前納で借りて頂きまして二十三日頃主人が大連に出て参るまでに間に合ふ様出発いたしました。御いとまごひも申し上ず出かけまして誠に御不礼申し上りました 何卒あしからず いづれ帰りましたら御申訳に参上いたします 阿らく右御わびまで乱筆にて御ゆるし被下まし 五月拾日 門司にて 鳥居きみ

封筒裏 東京市京橋区錦町国民新聞社 社長 徳富先生 令夫人  
封筒裏 門司香港丸にて 鳥居きみ子

土俗学上より観たる蒙古(日付だより) 昭和2年3月3日 徳富猪一郎筆)

鳥居龍藏博士は学者として特に其の夫人に恵まれてゐる。今博士夫人きみ子女史の著述『土俗学上より観たる蒙古』の一冊を手にして、轉た此感を深うす。此書は菊版一千二百頁の麗大なる巨冊だ。とても一氣に読破することは能はない。されど其の前篇百五十章、其の後篇七十章、何れも内容充実してゐる。而して挿畫の沢山なることが、更に錦上花を添へてゐる。いま簡単に本書の成立に就て語らん乎。鳥居博士の跋文の一節、最も能く尽している。

今より省みれば、二十年以前、私共夫妻は幼児幸子を伴ひ、東蒙古喀喇沁蒙古王府に留り、此處で種々の調査の準備をなし、更に其次の年より、東北方蒙古に就いて調査しました。抑も私共が何故に、蒙古に約三年の星霜を費したと云うに、之は東蒙古が、人類学や考古学の上から、全く暗黒界に属して居たからである。(中略) 妻の此『土俗学上より観たる蒙古』は、固より一般の蒙古各旗の事に属すれども、妻の女性たる事と、幼児幸子を伴へる關係上、彼は普通接近なし難い蒙古の婦人、小児等に、日々接触談話する機会が多かつたから、幸にして蒙古の正しい精密なる土俗を、調査する事が出来ました。如何にもその通りである。加之鳥居夫人には其の外君の學問上の素養と、熱心に没頭し、亦た女性としての特殊なる觀察眼があり、更らにそれを能く記述する文藝に饒んでゐる。以上のもの湊合して、茲に此の好著作が出来上つたのは、鳥居夫人の爲のみならず

ず、博士が「私は此出版と共に、夫婦及び一家共同して、斯学の研究に向つて、一層努力せん考えであります。」と云うたのは、如何にも尤もなる次第だと思ふ。但だ此の一家の中に、島居家第二世たる可き龍雄君が、巴里に於て早折したるは、如何に終天の恨事である可きよ。記者は一九二六年（大正十五年）十一月一日附にて、認められた龍雄君の跋文を見て、実に双涙の頤に交るを禁ずる能はざるものがあつた。惟ふに此の一冊は、近く幸子女史が携へ還る同君の遺骨に献げらるゝ第一の手向物であらう。

川上 俊彦（1861〜1935 文久1〜昭和10）新潟県

明治・大正期の外交官。東京外国語学校（東京外語大）。貿易事務官としてウラジオストク滞在中、日露開戦に際し、ロシア後方攪乱の謀略に従事してポーランド独立運動の指導者と接触し、その縁でポーランド独立後の大正10年、初代公使に赴任。その間ハルビン・モスクワ各総領事、また満鉄理事などを歴任。その後北樺太鉱業設立とともに社長に就任、のち日魯漁業社長も兼ねた。

明治37年1月1日付（絵葉書・ペン字）

謹みて新らしき年の御挨拶つ申上候 御全家様の御幸福を祈り参らせ候 俊彦 ときは

明治三十七年 正月 浦塩

葉書宛名 Mr and Mrs. Tokutomi

東京赤坂区青山南町六丁目三十一番地

徳富猪一郎様 同奥様

川上 常盤（1875〜1959 明治8〜昭和34）北海道

川上俊彦の妻。外交官夫人として社交界で活躍した。軍神と言われた広瀬武夫とも交友があつた。後に広瀬のロシア生活の思い出を語っている。展示書簡は半世紀も前に蘇峰の叔母・矢嶋楯子の紹介で民友社の雑誌に寄稿したことなどを懐かしんでいる。

昭和27年2月8日付（封書・墨書）

立春と八申ながら寒さ八中々にきびしく候へど熱海八如何に候や 御機げんよう渡らせられ候事と存上候も御用心のほど念じ上候 誠に御無沙多申上御申わけなく候 只今眼の前にかざりある御写真八昭和二

十二年六月と御記するしあるを拝し御奥様も御健在にていろいろと御優しき御もてなし給ハリし六年前を想ひ出し誠に御懐かしう存じ参らせ一筆そめて候 先生にハその後御気げんよう渡らせられ視野 実ハ私事夢ナドえがきこの新春には一つ熱海詣でをとひとりひそか二たのみ居り候へしに一月三日に思もよらぬ高血あつての宣告にて安静と菜食生活を申渡され未ダしずかに致し居り候しまつに中々以て近く夢の実現ハむづかしく候まませめて一筆なりと参らせバやとぞんじ候事に候 矢嶋楯子先生の御紹介にて御許様二御目にかかり可なりや婦人雑誌などに時折書かせていただきし半世紀あまりも前の事ども想ひ返し御厚情の数々うれしくもありがたくも亦御懐かしうも存じ申候 あ頃ハ夢多き娘時代に候へしがいつしか七十八の老嫗とハなりて候 しかしたのしかりし事ハ幾とせ経ちても消え不申候 感謝の想返のしるしとして何か御菓子なりと御送り申上度く存じ候 品を決め次第一寸申上べく候 呉々も御自愛被遊御健かに渡らせられ候やう神にいのりて念じ上候 あらあら可祝 二月八日 川上ときは 徳富蘇峯先生 御許に

封筒表 熱海市伊豆山押出一一九 徳富猪一郎様 御まへに  
封筒裏 東京都大田区田園調布四ノ二〇三 松本方 川上ときは

岡田 信一郎（1883〜1932 明治16〜昭和7）東京

明治・大正期の建築家。東大卒。大正元年大阪市中央公会堂のコンペに当選し、建築家としてのデビューを飾った。その後大正14年東京の歌舞伎座、昭和3年鎌倉国宝館など近代的な鉄筋コンクリート構造で日本建築様式を再現して注目された。大正15年東京府美術館をギリシャ様式で、昭和9年明治生命ビルをルネサンス様式でつくり、また関東大震災で焼け落ちたニコライ堂のドーム再建設計にあたるなどして様式建築の鬼才とつたわれた。名妓・萬龍との結婚も彼の人気を高めた。早大、東京美術学校の教授として建築史などを講じ、後進の指導にもあつた。

大正14年4月28日付（封書・墨書）

拝啓 時下御清栄大慶に存奉候 御著書頂戴致し有り難く存じ候 拙文御高覧を辱くせしさえあるに先生の御褒賞にまで与り満悦有頂天に相成候 母妻共三人貴翰繰り返し拝見欣喜致居候謹而御礼申上候 敬



具 四月廿八日

岡田信一郎

徳富蘇峯先生 侍史

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峯先生 侍史

封筒裏 牛込神楽町二ノ二三 岡田信一郎

大正14年1月1日付 (封書・印刷)

「新築落成歌舞伎座初春開場興行」案内状(カラー)

封筒表 府下大森入新井町源蔵原二八六二 徳富猪一郎殿

封筒裏 牛込神楽町二ノ二三 岡田信一郎

岡田 静子(萬龍) (1894~1973 明治27~昭和48) 東京

赤坂の置屋春本抱えの芸妓。明治40年「文芸倶楽部」が実施した全国百美人の読者投票で九万票を獲得して一位になった。谷崎潤一郎の友人で東大卒の恒川陽一郎との恋愛結婚で世間を驚かせたが、恒川は結婚2年後に病死。その後建築家の岡田信一郎と再婚。岡田の没後は茶道の師範として多くの弟子に慕われた。

大正12年7月13日付(封書・墨書)

昨日は御伺致しゆるゆる一日遊して頂き美しき御處にて御馳走様に相成り誠に休養を致し候 母も非常に喜び居呉れ御礼申上る様申つ可里候 御奥様には多くの御客様に御接しに相成御内には又色々御事志げく定免し御つかれ御事と存上候 何卒御身御自愛の程願上候 さて承れば御嬢様いよく御縁談御とのひ遊され候御由 誠に御めで度極とふかく御悦び申上候 粗品ながら御祝の御志るし迄二御覽二入候まま御納免下され候はバ御嬉しく存じ上候 末乍ら先生へ何卒御宜しく仰せ上被下度願上候 先は御礼可たく 右まで

十一月十三日

徳富蘇峯先生 みもとに

封筒表 徳富御奥様 坐前

封筒裏 牛込神楽町二ノ二十三 岡田内

岡田静子

相馬 愛蔵 (1870~1954 明治3~昭和29) 長野県

明治・大正期の実業家。蚕種製造に携わる。明治34年上京し、本郷中村

屋を譲り受け、パン屋を始め、明治40年新宿に開店。ロシアの無政府主義の盲目の詩人エロシエンコや亡命中のインド革命の志士ラス・ビハリ・ボース、芸術家など多彩な人々が集うサロンのような中村屋は特色ある店として知られた。著書に『一商人として』『続・一商人として』がある。書簡にある昭和18年の文化勲章受章者7名とは伊東忠太・鈴木梅太郎・朝比奈泰彦・湯川秀樹・徳富蘇峯・三宅雪嶺・和田英作である。

昭和18年4月30日付(封書・墨書)

謹啓 文化勲章御受領奉祝賀候 御七人中其四人迄が我辱知なりし事は自分も共に賞されし心知にて喜処に存じます。日頃御配慮を忝ふし居るポーズも到って丈夫にて目下昭南島(シンガポール)にあり来る十月は入印の予定の由に候間御喜被下度希上候 御令闈様にも嘸かし御満足被遊候事と荊妻よりも宜しく申出でました 御祝の節に甘ひ者を少々御届致させ可申居候間御風味被下度候 敬具

四月三十日

徳富先生

相馬 愛蔵 黒光

封筒表 大森区山王 徳富蘇峯先生

封筒裏 渋谷区千駄ヶ谷五ノ八八九 相馬愛蔵

相馬 黒光 (1876~1955 明治9~昭和30) 宮城県 本名・良

随筆家・中村屋創業者。相馬愛蔵の妻。旧姓・星。星家は伊達藩の漢学校に入るが校長と対立して退学、横浜のフェリス女学校に転じ、更に明治28年に明治女学校に入り、島崎藤村らに学んだ。明治30年作家志望をすて、相馬愛蔵と結婚して新宿中村屋を創業した。キリスト教的新教育を受けた知性ある女性として、荻原礫山、中村舜、ロシアのエロシエンコ、インドのビハリ・ボースら芸術家や亡命者の保護者として果たした役割は大きい。多彩な人々が集まる中村屋はサロンの観があった。著書としては『黙移』『広瀬川の畔』『明治初期の三女性』。愛蔵、黒光の長女俊子はインド独立運動の志士ボースと結婚。昭和25年俊子の死を契機に黒光は仏教に帰依する。

—昭和28年6月9日付(封書・墨書)

拝啓 去る五日は雨中にもかゝらず予定時間以上に亘る御講演を拝聴いたし此上もない感激を覚えました 御声にも終始お疲れを見ずむしろ終りに近づくに従い音吐朗々吐者を凌ぎ御元氣な御姿を仰ぎ歡喜のあまり涙さえこぼれました 聴衆も生氣と希望をとりもどしたごとく存じます 然し不思議にも納得のできないことは場内を見渡して殆んど青年男女の姿が老の眼に入らなかつた事でございます 附添の安雄夫婦にきゝましても矢張中年以上の人のみが多かつたよし それなればこそ一日も永く先生が御長命を遊ばす様御自重を心から御願ひ申上まする あの日 □□御挨拶をと存じましたなれども御混雜の御様子ゆえわざと御無礼して帰りました 病主人にはなしきかせまして喜んでもらいました 若奥様もチラとお見かけ致しましたが失礼致しました 六月九日 相馬黒光

徳富蘇峯先生

封筒表 熱海市伊豆山晚晴舛堂 徳富蘇峯先生

封筒裏 東京都下調布局区内 小島方三九 相馬黒光

相馬黒光女史の『黙移』に就いて(日だより)昭和十一年八月二十六日 徳富猪一郎筆  
黒光女史は、相馬愛蔵君の夫人にして、新宿中村屋の主婦である。女史は明治中期の尖端女性の、然も健全なる尖端女性の代表者の一人。されば其の自叙伝が、同時代の日本インテリ女性史として、特殊の興味を持つてゐるのは、必ずしも意外ではあるまい。但だ其の意外でない記者に取りて、意外の驚喜であつたのは、本書中に於て、佐々城豊寿女史の名を見出したことだ。記者は「国民之友」時期に於て、將た「国民新聞」初期に於て、屢ば女史と往來した。記者の往の方は極めて少なかつたが、女史の來の方は寧ろ頻繁であつた。それは婦人問題の研究及び運動に就てあつた。婦人矯風會をして、今日あらしめたる第一人者は、固より矢嶋桐子女史だ。然も其の初期に於ける佐々城豊寿、潮田千勢子二女史の功勞は、決して閑却す可きものではない。予は何かの機会に此事を語らんと欲してゐた。今ま本書に於て、之を見出し、欣快に勝へない。本書には佐々城女史のことを、叔母として記しあれば、著者即ち相馬女史は、其の親縁である事は勿論だ。従つて女史が、佐々城女史の女信子と、國木田独歩との情事に就て、極めて内面的の知識を分配したのも、決して不思議は無い。此れも今や一夢である。当時佐々城氏の三田四國町の家に、從軍記者として、案内を受けたのは、国民新聞側では、阿部無佛、平田久、國木田独歩、其外には予及び深井英五君であつたと思ふ。島田三郎君の毎日新聞からは榎頼君が一人參會した。其の饗宴の席上にて、佐々城家の女信子が「雷の進軍」の軍歌を謡つた。それが独歩對信子の情事葛藤の起源であつたとは、我等同人は勿論、神も知らなかつたであらう。

記者は餘儀なき事情の爲めに、柄にもなく独歩及び佐々城女史の間を調停し、其女信子との正式結婚までに漕ぎ付けしめたが、やがて破綻を來たし、独歩からも、佐々城女史からも、双方から氣まづき感を持たれたのは、独り自ら苦笑の外はなかつた。本書は内容豊富である。記者は唯だ記者自身を知るころの一端を挙げて、姑らく之を江湖の說書子に紹介するに止める。

### ③ 鳩山家の縁

鳩山 和夫(1856~1911 安政3~明治44) 東京

明治時代の政治家・弁護士。大学南校・開成学校(東大)卒業後、渡米してコロンビア大学・エール大学に学ぶ。明治13年帰国後東大法学部講師、一時辞任し弁護士となる。東京代官組合長、東京府會議員、明治18年外務省樞大書記官として条約改正問題に參画。翌年東大教授になるが、明治23年辞任し弁護士に復する。明治25年衆院議員に當選。立憲改進党に入る。明治29年には衆院議長、明治31年憲政党内閣成立で外務次官。辞任後は東京専門学校(早大)校長・早大総長。憲政本党幹部であつたが、脱党、明治41年立憲政友会に入党した。

明治( )年( )月( )日付(封書・墨書)

拝啓 只今大久保氏二問合せ處同氏ハデニソン氏ノ宿所承知不致由二御坐候 就てハ甚乍御手数御配下ノ者二命じデニソン氏ノ宿所御探偵ノ上御一報被下度候以爲御依頼仕候 勿々 鳩山和夫

封筒表 大手町四丁目 福井方 徳富猪一郎様 親扱下  
封筒裏 村上方 鳩山和夫

鳩山 春子(1861~1938 文久元~昭和13) 長野県

女子教育者。旧姓・多賀。父努は旧松本藩士。明治7年上京して竹橋女学校に入学。同校廃校後、東京女子師範学校へ移り、特別英語科および師範科本科を卒業。明治14年に母校の教員となるが、同年米國留学歸りの法律学士鳩山和夫と結婚。長男一郎、次男秀夫を出産後旧職に復歸する。明治19年には共立女子職業学校、明治28年には女性を対象とした通信教育、大日本女学会の設立発起人となるなど教育界で活躍する。政界

入りして衆議院議長などを務めた和夫の妻として政界や社交界ともつながりが深く、愛国婦人会、戊申倶楽部の発起人など多くの婦人団体に名を連ねた。また熱心な家庭教育で長男一郎を政治家、次男秀夫を帝大教授に育て上げ、近代的良妻賢母の典型とされた。夫の死後、共立女子職業学校家庭科の監督となり、大正11年には校長に就任。昭和10年には学校の名称変更に伴い共立女子学園長。昭和11年からは同高等女学校校長も兼任した。自伝に『我が自叙伝』

昭和11年1月18日付（絵葉書・ペン字）

拝啓 御多端の御事ヲモ厭はせられず御懇篤なる御は書も頂戴致し光栄の至 深く感銘奉存候 右御礼迄 一言得貴意候 春 敬具

一月十八日

葉書表 京橋銀座西八丁目九民友社 徳富先生 御令夫人様

小石川音羽町 鳩山春子

葉書裏 共立女子専門学校・共立高等女学校・共立女子職業学校

本建築校舎の絵

鳩山 一郎（1883〜1959 明治16〜昭和34）東京

大正・昭和期の政治家。鳩山和夫の長男。東大卒。東京市会議員、大正4年には衆議院議員に当選。政友会に属し、昭和2年田中義一内閣の書記官長。昭和6年大養内閣、昭和7年斎藤内閣の文相に就任。昭和8年の「京大滝川事件」に文相として関与し、権力による大学自治への干渉とされた。昭和9年大蔵省疑獄事件に連座。昭和17年の翼賛選挙には非推薦で当選したが、もっぱら軽井沢で隠居生活を送った。敗戦後自由党結成に参加し、初代総裁となり反共声明などで話題をまき、昭和21年5月組閣寸前に公職追放となり吉田茂に総裁を譲った。昭和26年追放解除直前に脳溢血で倒れ、回復後吉田と対立、鳩山派を形成した。昭和29年日本民主党を結成、総裁となり、首相就任の夢を果した。鳩山内閣は吉田内閣が、対米従属的であったことへの国民の不满を捉えて、憲法改正問題や日ソ国交回復に独自の政策を打ち出すなど、自民党政権の基盤をつくりあげた。戦前・戦後を通じて当選15回。妻・薫は共立女子学園長。長男威一郎は大蔵次官から参院議員。

昭和13年7月10日付（封書・墨書）  
拝復 父の如き御親切誠二難有厚く御礼申上候 忍耐は勿論個の要素の修養二努め御芳志二報ゆる覚悟二御坐候 右御礼申上候 勿々頓首  
七月十日 一郎

封筒表 大森山王二丁目山王神堂 徳富先生  
封筒裏 鳩山 一郎

昭和20年10月17日付（封書・墨書）

拝復 十月十四日付の御芳墨只今拝誦仕候 東京は言論自由をはき違ひ共産党の無軌道の演説ハ遺憾至極ニ御坐候 吾々が天皇制維持二命を掲げ出すこと勿論ニ御坐候間御安意被成下度奉存候 松野君一昨夜九州二出發致候 帰郷後二回覽に可供又安藤君二八明日可示候 止む二止まれず新党結成二努力中の小生共々御支援の程切ニ奉希候  
十月十七日 鳩山 一郎

封筒表 山梨県山中湖畔旭日丘双宜荘 徳富猪一郎先生

封筒裏 麻布区永坂町一 石橋方 鳩山 一郎

鳩山 薫（1888〜1982 明治21〜昭和57）横浜

女子教育者。旧姓・寺田。薫子とも呼ぶ。女子学院卒。父は衆議院事務官の書記官長、貴族院議員。母は鳩山春子の姪にあたる。18歳で鳩山家の養女となる。宣教師経営の私塾ブラクマ・ホームで学ぶ。明治41年鳩山一郎と結婚。昭和13年には養母春子の死去に伴い、後継者として共立女子学園長に就任。昭和26年には共立女子大学長、同短期大学長。93歳で死去するまで在職した。公職追放や闘病から再起した夫を支え、昭和30年には日ソ会談のためロシアにも随行。一男五女があり、長男威一郎をはじめ、孫2人（由紀夫・邦夫）も国会議員という政治家一家を築く。

（ ）年7月1日（名刺）

御見舞 鳩山薫子

徳富先生

東京市小石川区音羽町七丁目十番地

4 美術品

「風景六幅」高嶋 北海画 (軸物)

高嶋北海 (1850~1931 嘉永3~昭和6) 山口県  
フランス人の地質技師にフランス語と地質学を学ぶ。明治17年イギリス  
のエンジンバラで開かれた万国森林博覧会に出張し、引き続きイギリス各  
地、ヨーロッパを歴訪。その後4年間フランスのナンシー森林学校に留  
学。地質学者・森林学者の目で対象を見つめ、独自の画風を展開した。  
アール・ヌーボーに影響を与え、ナンシーの美術館はじめ、フランス各  
地に多数の絵が所蔵されている。

「神社及神宮印信」(軸物二幅)

二幅のうちの一幅には官幣大社58社、もう一幅には官幣中社、国幣大  
社・中社、別格大社63社の御朱印が捺印され、全部で121社の御朱印を  
納めた。昭和8年軸製作者が、「長い日本の歴史を鑑みて神社の御朱  
印の配列をどのようにしたらよいか」と書簡で蘇峰に尋ね、蘇峰の意  
見をもとに印譜を捺印した二幅である。

「海老の図」斎白石画 (軸物)

斎白石 (1863~1957) 文人・画家・篆刻家。湖南省湘潭県出  
身。号は非常に多く、三百石印富翁・寄萍堂主人・借山吟館主者・杏子  
塢老民など。農家に生まれ、早いうちから肖像画などを書いて生計を立  
てたが本格的に画の勉強を始めたのは27歳からで、60歳以降に独自の画  
風を確立した。蝦(海老)、蟹、鶏、蛙を描くことに長けており、バラ色  
でアサガオ、サクラなどの花を色濃く描いた草花と細密画の草虫を巧み  
に融合させた。斎白石が描く題材は広く、山水、人物、花鳥虫魚を生き  
生きと描いている。画・篆刻ともに呉昌碩の影響を最も受けている。

5 書 (軸物)

- ・蘇峰の書 (四幅)
- ・新島襄、勝海舟、徳富一敬、横井小楠の書 (各一幅)

参考文献

・「続・蘇峰とその時代」高野静子著 徳富蘇峰記念館 平成14年

- ・『コンサイス日本人名事典 (第4版)』(株)三省堂 平成13年
- ・『近現代日本女性人名事典』近現代日本女性人名事典編集委員会編 ドメス出版 平成13年
- ・『蘇峰自伝』徳富猪一郎著 中央公論社 昭和10年
- ・『大人名事典』平凡社 昭和28年
- ・『日本近代文学大事典』講談社 昭和52年
- ・『同志社山脈 113人のプロフィール』同志社山脈編集委員会編 晃洋書房 平成14年
- ・『ロシアにおける広瀬武夫』(朝日選書57) 島田謹二著 朝日新聞社 昭和51年
- ・『杉田久女遺墨(続)』石昌子編 東門書屋 平成4年
- ・『独歩百年記念誌 国木田独歩』佐伯市独歩百年記念事業実行委員会編 平成5年
- ・『二人の父・蘆花と蘇峰』渡邊勲著 創友社 平成19年
- ・『徳富静子』晚晴草堂同人(徳富蘇峰)編 大日本雄弁会講談社 昭和29年

蘇峰堂だより

昨年6月27日、二宮町生涯学習センターラディアンにおいて、土曜古文書会(横浜市)主宰の「古文書を読む会」が開催されました。茅ヶ崎塵外館の皆様を講師として、当記念館所蔵の書簡などを教材に約60名の参加者とともに学びました。

〈徳富蘇峰記念館案内〉

- 開館日 月・水・金曜日
- 〈特別開館日〉 2月(梅の季節)は 土・日曜日も開館
- 〈特別閉館日〉 年末・年始 8月の第3・4週

■開館時間 午前10時~午後4時

■入館料 大人 500円

中・高生 200円

〈団体割引〉10名以上 一割引 450円

平成二十二年二月五日発行

編集 高野 静子  
宮崎 松代  
和田 千枝

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念館塩崎財団  
〒259-0233 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五

TEL 〇四六三二七一一〇二六六  
FAX 〇四六三二七一一〇六七七

ホームページ  
http://www.2oacnre.jp/~tsoho/  
E-mail:tsoho@peachocnre.jp